ウリニュースレター

非暴力直接行動

No. 109
11/2-'80

戦争抵抗者インター日本部・大阪市阿倍野区旭町2-12-2 ウリ大阪 発行

何故宣伝戦争か

見える敵（現地）と見えない敵（都市）

『19日の不払い連びっくり講座へ革命的生き方教えます〉で、はじめて一反原発が革命の運動なんや、いうことと、それが何よりも宣伝戦争として行われる一いう意味が、やっと判ったんや！

一そらスゴイ・どんなふうに判ったんや！

『つまり、な、ふつう運動いうたら、①相手（対象）の出方を監視する。②相手のやり方に介入し、抗議する。③相手のやり方に参加して路線を変えさす。④相手のやり方を妨害・抵抗し、攻撃を加えて企図を挫くーいうこの四つのやり方の変化と組み合せや。』

一原発たてさせへん、いうことで、反原発運動も、同じやでー

『そうや、例えば原発建設現地での反対運動はこのやり方で、政府と総資本が強引に推し進める、原発建設のスピードを中止に追いこせてきた。そやけど、ここでわざわざ言いたいのは一（現地の運動は反原発のかなめやし、その帰結が重大なことは云うまでもないけどな）一たゞそれだけでは一四つのやり方のみに眼をむけた運動だけでは一原

10・25 朝10時半、関西電力本社ビル玄関を占拠しての市民告訴（参照 おこまるくらし 11号記事）

宇利乃奈加万乃 安伊古止波 與天余乃里越

振替 大阪三二七三七 ウリジャパン 何井孝

発推進の戦略にうち克つことがでけへんのやないかーいうことやねん』

『いやあー。支援活動をも含めて、運動の中心いうか原点は、やっぱし現地やで。』

『そら、もちろんや。一応も二応もそのことを承知した上でのことや。

つまり「反原発」と云うても、圧倒的多数のくたちにはピンと来えへん。みんな現地でなく、それ以外のとこ、都市でくらしてる。

都市の人間に、原発は直接・具体的関係として、その姿がみえへん。見えへんもんに〈四つのやり方〉で、どうやって闘え、と云うんや』

『そこで、都市の人間も、現地に連帯したり、出かけて闘うということが出てくるんやろ』

『うん、うん、例えば三里塚の農民が、政府公団を相手に十数年間も闘いつづけてる。負けへん。それは現地農民だけが闘ってるのやない。三里塚に関心をよせ、支援するいろんな人たちや党派など、全国的なひろがりがあるからや。

しかしまだそれだけでは、なかなか勝たれへん。で、最近、三里塚農民は、三里塚から外へ出かけていって他の運動と連帯することで、他の運動の力をも自分の力としようーとする方向が、ようやく出てきている。

つまり現地結集だけでは、支援を入れても圧倒的に小数や。だから、現地と無縁の場所にいて問題に気付くことのない大多数の人たちの動きをどうするか、どんな動きをしているかを視程に入れた活動がいる。それをつくりだすんとアカン。それは、反原発運動でも同じことや』

非現場的（都市的）反原発運動の意味

『ひとつは「都市での反原発運動をどう闘ってよいか、むずかしい」ということが、よく言われたやろ。

（ーそれで、大阪では、熊取の京大実験炉や、核燃料輸送や、原発建設予定地和歌山県日高や、あるいは労働者被曝の岩佐訴訟などが、身近かな闘争現場として、とりあげられる。しかし、それを自分の現場として全身的にのめり込まないかぎり、やはりどうしても支援であり、擬似現地であり、少数（都市での）特殊の問題をなかなか出られへんー）

つまりこれは、現地主義というか、四つのやり方的運動にとらわれている限り、わたしらにつきまとう問題や。

云いかえると、都市生活の中では、四つのやり方の対象となる敵のすがたが、なかなか見えへん。しかも原発の問題は、すこぶる都市的で市民的や、ということが特質なんや。

どう考えてもわたしら都市に生活してたら、現地運動はでけへん。都市の反原発運動とは、眼には見えへん〈都市的で市民的な〉その原発の質を問題とすること以外にない。

「その、都市的で市民的、というところもうちょっと説明してもらわんと……」

「原発の問題は、もはや単に原発がとまれば解決、というわけにはいかんとこまできてる。このままでは、もう地球的な人類の破滅をむかえるしかない」現代都市文明の末期的な進歩と繁栄の意味を、原発こそが象徴してるのや。

そして、なおいまも私らがどっぷりと首までつかって、ぬきさしならん浪費的な都市生活の日常こそが、この原発をつくり出すものを支え、それに拍車をかけてるんや、いうことを教えてる。

そやから、ふとたまにでもそれに気付いて、反原発をちょっとでも口にしたとたん、都市の私らにとって、反原発は、そのような都市生活の日常を否定するものとしての、自分の生き方、くらし方、ものの価値基準の変革を迫るものとなる。

しかしナンボ理くつで判っても、都市を中心にする巨大科学技術と高度成長経済がつくり出してきた〈原発社会〉のなかで、私ら市民は、もっと豊かな生活を！というその欲しげなくらし方を、なかなか簡単にはやめられへん。そんな私らの日常のくらしかた、生き方こそが、原発そのものを支え、さらに原発推進の基盤となっている現実をどうすることもでけへん。

勿論、政府や電力会社など推進側は、何よりも私らの弱味を知っている。それ以上に、絶対多数市民の「原発に対しての無知無関心な」意識を、できるだけそのままに、そっとしておきたいと思ってる。年間数百億という原発宣伝費が、全部が全部、都市の一般市民に向けてであるということは、反原発運動が、都市市民に向けた宣伝工作の重大性に気付かない間に市民をとり込もうとする先制攻撃である。また何よりも宣伝戦争をイヤがっている反証明でもある。

原発がすこぶる都市的で市民的問題やいうことは、また都市の反原発運動は、この都市的市民的な〈原発の質〉をこ

▼使用済切手・国鉄切符のコレクションをしています。このニュース送付封筒貼付の切手も、切抜いておいて、まとめてぜひお送り下さい。

そ課題とせなアカンということや。

そこで問題は！、原発について都市市民は、「成り行きまかせいうか、無関心いうか、無責任なまま、ときどき聞えてくる推進側の宣伝の云うとおり「やっぱり必要やろな」ぐらいに思ってる ということや。

スリーマイル島事故以来、原発はすこぶる危い。放射能はコワイ。とみんな知ってる。ところが先日歩行者天国でアンケートとったら、「そやけど…石油が足らへんから、やっぱし原発は要るんとちゃうか」と十人が十人答えた。

つまり都市市民は、原発について格別に根拠ある知識があるわけやない。だのに、中立的というより、政府・電力側の立場に傾いて（まんまと）、電力側のキャンペーンに何となく乗っている。推進側の期待どおりの意識状況になっている。

この状況こそが都市での反原発運動にとっての対象課題やという認識が運動の出発点にならなアカン。そしてこの2とは、〈四つのやり方〉的運動論では対応しきれへんということや。

『はは、それで不払い運は、しきりに宣伝戦争（宣伝戦争）、というわけやな。』

『宣伝戦でなく、わざわざ宣伝戦争ということに、勝負を全面的に賭ける意味があるんやで。

「現地運動」は文字通り「原発設置阻止」やけど、「都市の運動」は「原発反対」でとどまるのではない。「原発の電気なんか、もう一切いらん」「豊かな生活、お断り」という革命的信条！を、自分の声で以て市民の中に響きわたらせること――その意味で内（自分）と外に対する、いわば革命宣言の流布である。

それを不払運でいうなら、まず第一に、何よりも運動者自分自身の生き方・くらし方、価値感をかえる――自分へ向けた問いであり（その問いにおいて）、運動がこれまでに持ちえなかった新しい質を、（宣伝の創造を媒介にして）つくっていくということや』

宣伝戦争の意味

『宣伝戦争や、云うとき、何よりはっきさせておかなアカンことは「運動の対象であり、敵であるのは、自分自身なんやその自分をも含めた大多数一般の市民や」ということや。

例えば関電の電気代四月分水ましサギを告発し、払戻しを交渉するとき、交渉の質の新しいつくり出しと、そのやり方での自己変革をどれだけ追及しえたか、そしてそのことをどのようにどれだけ市民に伝えひろげることができたか――が課題でないならば、殆ど意味をもたへん。なんぼ関電をやっつ

け、頭を下げさせたとしてもーやも

〃〈不払い連〉運動にとって対象となる敵は、関西電力ではなく、市民や、というのが宣伝戦争の意味やな〃

「そして現地の反原発運動は、ひとつひとつ具体的に原発をとめることやけど、都市の運動は、その原発を生みだす自己内部の社会構造と闘うことやねん。自分ら市民が、いまどんな状況で〈豊かなくらし〉をしてるか、その自覚的覚醒を提起するのが、宣伝戦争やねん。

そして宣伝戦争をやるんやということで、都市運動はやり方がはっきりし、いろいろと変ってくるはずや」

生き方くらし方を変える運動

〃不払い連と云うと、シュプレヒコールは調子はずれの大阪弁やし、替歌うたって抗議したり、一方ヤ所興寸劇でアピールするなど、まるで軽薄で、景気よく目立つことをやらかして、自分らがまず一番たのしんでやってる運動グループ、いうイメージやけど、それが宣伝戦争がいな〃

「不払い連のOちゃんしってるやろ。彼女が反原発の集りにきたきっかけは、たまたまフォークシンガーの古川豪さんが出演していて、それを聞くためやった。そやから、原発が右むいてるか左むいてるかも知らんかった。人前で話したりするのもとより、まるで無口でまるで目立たない存在だった彼女が、去る10月の反原子力の日行動実行委の事務局をやり、反原発秋まつりとそのあとの市民の大デモでの司会を、F君（彼が不れいなにきたは、ほんの半年前、それも運動なんて考えたこともなかったのに、次の例会で早速替歌で歌うたう役があてられたのがそもそものはじまりやった）と二人で、さりげなくやるというほどに変った。つまり司会はうまいへたやない。自分のことばで、自分なりにやれば、みんなが助け補うてくれる。それが仲間の集会やし、そんな信頼いうか関係を追求するが運動や（司会がエラそうにするが運動やない）いうことが実感として判るほど変ったんや。

家の中でじっとしてて、宣伝戦争はでけへんように、机に向

一味違った反原発秋祭

十月二十五日午後一時から、大阪市北区の南天満公園で反原発秋まつりがおこなわれた。雨模様の悪天候のなかで二百人あまりが参加、催しの後、関電本社をとおり、中央郵便局までデモをおこなった。

今年の特徴は参加者全員で秋祭りをつくろうと、代表者の演説だけに終らせず、歌や寸劇、万才などで主張をアピールしようとしたことだ。それぞれ表現に智恵をしぼり、なれない手ぶり身ぶり、エラー続出に、参加者が笑いころげることもあって、楽しい催しとなり、パターン化した演説だけの団体は肩身の狭い思いがする、いつもとは一味ちがった催しとなった。

▼人民新聞 11月5日号

▼たんぽぽ新聞号外「聞いて下さい」よんで下さい。お申出の方に送ります。送50円以上カンパを。

って本をよんで、生き方くらし方をどうして変えようかと考えても、そうむりや。心がけやりクリで変るもんやない。つまり体を動かして、運動そのものを創り出し変えることで自分が変る。

まず自分が変り、運動が変らんで、一体なんで世の中が変えられるんや！いう、しごく当り前のことを彼女はすこしずつ確実に、体で示しているということや。

〃そやけどなあ…人前でおどったり、芝居したりで、変ることになるんかいな〃

〃そら、チンドンヤみたいな表層が目立つし、そんなとこだけを気にして見てるからや。しかし、何よりも身軽るに、気軽るく、あらゆる機会を見つけて「体を動かす」ということが、宣伝戦争の出発点やし、基本にあることはまちがいあれへん。

つまり、「固苦しく、時には深刻にとらえているもあから自分を解き放つものとしての宣伝戦争の意味と、そのように身軽るにうごく、うごき方の工夫、創造としての、既成の運動概念からの解放」として、それらがあらわれているということや。

それで「反原発運動は、革命運動や、宣伝戦争や」というのは、ちょっとカッコつけすぎみたいに聞こえるけどいま、不払い連ではほんまにそうなんや。運動をやりだしたみんなは、そのときからすこしずつ変り出し、びっくり講座で、改めてそのことに気付いて、ほんまにびっくりしながら、何となく体で実感してたこと、これから更「示していくことの意味が、はっきりわかった」ということや。

（11月26日　F&K）

12月3日 PM6.30～ 不払い連しごと塾（申旬にやる〃年忘れ大行動〃の企画と準備など）ところ 06-604-0806 問合せ

12月14日(日) PM1～4 第一期 反原発女の学校〈なんで女と反原発か〉ところ 天満下車5分。PLP会館。

12月17日(水) PM6.30～ 不払い連第23回びっくり市民講座 ところ 天満下車5分 PLP会館となりつゆくさ小屋

12月19日(金) PM7～ 良心的軍事費拒否の会例会 ところ つゆくさ小屋（スライド上映）

▼今号の〃宣伝戦争論〃舌たらず、説明不足もあって、きっと疑問やご異論もおありと思います。ご教示の意味もふくめて、ぜひご意見をおよせ下さい。待ってます。ハガキ！

▼このところウリ事務所は千客万来。なるべく火曜日においで下さい。（さち）

大阪市北区の区相町2-1-2-2
駅伝戦争インター
日本郵（自共産）
発行 一九八〇年
十一月二十六日